

# C—71 衣生活の実態調査（第2報）

—延岡地区における勤労者世帯の被服費に対する認識—

緑ヶ丘学園短大

西川 志づ

○長田 昭子

1. 既製服の発達により利用者は急激に増加してきている。なおその上に新繊維の発達，生活様式の変化と

か、消費経済の波に乗った衣生活の考え方等、合理的、能率的な衣生活を営むためにはどうしたら良いか、被服費の実態を調査し、その内容を知り、被服指導に資する目的をもって本調査を実施した。

2. 調査対象は延岡市に居住する勤労者 500 世帯を無作為に抽出した。期間は昭和43年 3 月 1 日から昭和44年 2 月 28 日までの 1 年間とし、家族全員の被服に費した費用を自記式で記録してもらい、2 カ月ごとに回収した。

3. 調査の結果を概説すれば次の通りとなる。

a) 収入と被服費の関係については所得高に余裕があれば被服費は増してきている。所得高の多い家庭においては被服費の支出が多くなる。これは必需品の段階から趣味、奢侈的な性格に移りつつあるためと思われる。

b) 年齢別・性別と被服費の関係においては男女共余り極端な差がない。幼児老人は被服費は少なく、13~18 歳と発育盛りのものが多くなっている。

c) 月別と被服費の関係は季節の変りめ、ボーナス期特に冬に多い。

d) 品目別内容においては、品目の高級化にともなうて、衣料を上回る附属品、装飾品の費用の増加が目立っている。以上のような結果になった。